

2021年の回顧と新年の展望

～ 2021年の回顧 ～

国内景気～緩やかな持ち直し基調で推移

2021年の国内景気を振り返りますと、新型コロナウイルスの感染拡大状況により、緊急事態宣言等の発出・解除、経済活動の制限・緩和が交互に繰り返されるなか、均してみれば緩やかな持ち直し基調で推移しました。

項目別にみますと、個人消費は、短期的な需要の落ち込みはあるものの、全体としては緩やかな改善の動きがみられました。夏場までは、緊急事態宣言の発出に伴う外出自粛や店舗の休業などにより、外食、宿泊等のサービス関連の消費が落ち込みましたが、在宅時間の増加に伴う旺盛な家庭内需要を背景に、食料品などの非耐久財の消費は好調に推移しました。秋口以降は、半導体不足や部品・部材の調達難を背景とした供給制約により自動車販売を中心とした耐久財の消費が力強さを欠く動きとなった一方、緊急事態宣言の解除とワクチン接種の拡大を背景に、対面型サービス関連の消費に復調の動きがみられました。

設備投資は、製造業を中心とした企業業績の持ち直しに加え、高速通信規格「5G」関連の情報化投資や生産能力増強に向けた機械投資の需要拡大を受け、全体として持ち直しの動きが続きました。

生産は、海外の旺盛な設備投資需要に牽引され、輸出が堅調に推移するなか、増産傾向で推移しました。しかしながら、年後半には、半導体や部品・部材の供給不足により自動車工業が大幅な減産となるなど、回復のペースが鈍化しました。

県内景気

～新型コロナウイルス感染症の影響で一部に弱い動きも、緩やかに回復

県内景気を振り返りますと、新型コロナウイルス感染症の影響が窺われるなかで、観光関連やサービス消費など一部に弱い動きがみられましたが、好調な機械工業が牽引役となり、全体としては緩やかな回復基調で推移しました。

項目別にみますと、個人消費は、食料品などの巣ごもり消費が堅調を維持した一方、外出を控える動きが続いたことから外食・レジャーなどのサービス関連消費や衣料品が低調に推移したほか、家電品も特別定額給付金効果の反動で、夏場以降弱い動きとなりました。また、乗用車販売は、前年を上回る水準で推移していましたが、半導体不足などによる完成車メーカーの生産調整の影響で納車の遅れがみられたことから、秋口以降は大きく落ち込みました。

設備投資は、感染収束が見通せないなかで慎重姿勢が続きましたが、夏場以降は製造業を中心に回復の動きがみられました。また、公共投資は、概ね前年を上

回る動きが続いたほか、住宅投資も、持家、貸家ともに堅調な推移となりました。

生産は、本県の主力産業である機械工業が、好調に推移しました。世界的な半導体需要の拡大を背景に、半導体製造装置が増加傾向で推移したほか、電子部品や工作機械など幅広い分野でも増勢を維持し、鉱工業生産指数は全国平均を大きく上回る水準で推移しました。ただし、夏場以降には、半導体不足や東南アジアでのロックダウンに伴う供給制約を背景に、自動車部品で減産の動きが強まったほか、原油・原材料価格の高騰や部品・部材の調達難などが、好調な受注・生産の足かせとなりました。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業は、巣ごもり関連の一部で堅調な動きがみられたものの、外出自粛による店頭販売の低迷や、催事・展示会の中止・延期などを背景に、全体としては厳しい局面が続きました。

なお、観光関連をみますと、年前半は、外国人観光客が見込めないなかで、国内観光客も低調な状況が続きました。一方、感染拡大が落ち着きを見せ、首都圏などの緊急事態宣言が解除された秋口以降は、自治体の支援策も相俟って客足の回復がみられました。また、中部横断自動車道山梨－静岡間の全線開通に伴い、東海方面からの観光客が増加するなど、明るい話題もみられました。

～ 新年の展望 ～

国内景気～持ち直しの動きが維持されるが、感染再拡大が懸念材料に

2022年の国内景気は、ワクチン接種の進展に伴い経済活動への制限が和らぐことや、子育て世代への給付金・クーポン券の支給、Go Toトラベル・イートの再開など各種経済政策が下支えとなり、持ち直しの動きが維持されるとみられます。ただし、感染拡大防止と経済活性化に同時に取り組む必要があり、景気回復のペースは緩やかなものにとどまると考えられます。

項目別にみますと、個人消費は、感染再拡大が消費を下押しする可能性はあるものの、経済活動が正常化に向かうことで、緩やかな回復基調を維持することが期待されます。

設備投資は、輸出が堅調な製造業を中心に企業の業績や生産活動の持ち直しが続くとみられ、底堅い推移が見込まれます。

生産は、国際経済が回復に向かうなか、底堅い内外需要を背景に、持ち直しの動きが続くとみられます。ただし、半導体不足やサプライチェーンの混乱による自動車工業の減産長期化など、生産の下振れリスクには、注意が必要です。

県内見通し～緩やかに回復も、先行きには根強い不透明感

県内景気は、生産面において機械工業が増勢を維持するなかで、企業収益や雇用・所得環境の改善を通じて設備投資や個人消費に更に波及していくことが期待され、回復の動きが続くと見込まれます。ただし、新型コロナウイルス変異株の動向など、感染の拡大状況次第で経済活動の抑制と緩和が繰り返されることから、

そのペースは緩やかなものにとどまるとみられます。また、半導体をはじめとした部品・部材不足や、原油価格・原材料価格の上昇、円安の進行などの不安材料も多く、先行きに対して不透明感の強い状況が続くと考えられます。

個人消費は、ワクチン接種が着実に進んでおり、外出・消費に対する前向きの動きが徐々に顕在化するとみられます。また、店舗・消費者の感染防止対策が定着するなかで、政府や県・自治体などの需要喚起策もあり、持ち直しの動きが強まっていくと考えられます。

設備投資は、回復基調で推移するとみられます。機械工業において、生産能力増強投資が一定の水準を維持するほか、人手不足対策としての自動化・省力化投資が増加していくと見込まれます。山梨中央銀行が実施した「県内企業経営動向調査」の2021年度下期(2021年10月～2022年3月)設備投資計画においても、実施予定率が改善するほか、投資予定額も増加に転じる見通しにあるなど前向きな姿勢が窺われます。

生産について、半導体製造装置や工作機械、電子部品などを中心に機械工業が好調を維持するとみられます。また、半導体不足の解消が進むなかで自動車部品も増加基調に転じると考えられます。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業については、人口減少等による国内需要の伸び悩み、輸入品との競合激化などから、機械工業と比べると総じて厳しい局面が続くと思われま。ただし、コロナ禍において、インターネットを活用した新たな販売チャネルの拡大や新規イベントの創出などに取り組む先も増えており、新しいスタイルでのビジネスチャンスが広がるものと考えられます。

なお、観光関連は、国内旅行への高いニーズに加え、政府や自治体の需要喚起策を受けて、回復基調で推移するとみられます。また、マイクロツーリズムの機運も高まるなかで、首都圏に近い優位性を生かした国内観光客の取り込みが期待されます。

～ 寅（とら）の話 ～

2022年は、寅（虎）年です。虎は、食肉目ネコ科の哺乳類で、アジアにおいては最大の猛獣です。腹部は白いですが、体の上面から側面、そして尻尾にかけては黄褐色で、黒い横縞模様が入っているのが特徴です。シベリア南部、中国東北部からインド、インドネシアの島々、朝鮮半島に棲息していますが、日本には棲息していません。古くから、その毛皮は敷物などとして珍重されてきました。「日本書紀」には、朱鳥元年（西暦686年）4月頃、新羅の使者による天皇への献上品のなかに、馬や犬、金銀、金の器、織物などとともに虎の皮がもたらされたと記されています。

虎については、有名な話があります。昔、一匹の虎が百獣を食べ尽くそうと考えました。最後に一匹の狐を捕まえて食べようとしたところ、狐は「神が私を百獣の王にしようとしている。もし虎が私を食べるなら、神の命令に逆らうことになる。嘘だと思えば私についてこい。」と威張って言いました。虎はまさかと思い、狐のあとを付いていくと、他の動物は恐れて逃げだしました。虎は狐に感心

していましたが、「本当は、自分を恐れて逃げていた」とは気づきませんでした。この話からできたことわざが「虎の威を借る狐」です。

このように虎は強い動物の代表のように扱われていますが、単純に「強い動物」であるだけではありません。「虎の子」という言葉がありますが、虎は、自分の子どもを可愛がって、大切に育てることから、「大切にしてお手元から離さないもの」という意味で使われます。このことから、虎は強いだけでなく、子ども思いで情け深さも兼ね備えている動物として、昔から考えられていたことが分かります。

わが国の寅年の歴史を振り返りますと、豊臣秀吉天下統一（1590）、天明の大飢饉（1782）、日米和親条約締結（1854）、薩長同盟成立（1866）、第一回総選挙（1890）、日本興業銀行設立（1902）、東京駅開業（1914）、伊豆半島沖地震（1974）、チャールズ皇太子、ダイアナ王妃来日（1986）、日本長期信用銀行破綻（1998）、東北新幹線全線開通（2010年）などの出来事がありました。

また、山梨県関連では、県立甲府高等女子校創立（1902）、北富士演習場設置（1938）、日本観光地百選投票で昇仙峡が溪谷の部第1位に選定（1950）、甲府市で初の下水道使用開始（1962）、県内初の本格的ダム「広瀬ダム」完成（1974）、かいじ国体開幕（1986）、山梨総合研究所設立、県立フラワーセンター開園（1998）、若彦トンネル開通（2010）などの出来事がありました。

寅年生まれの名人としては、有吉弘行、石原さとみ、梅沢富美男、亀梨和也、神田沙也加、木梨憲武、木村沙織、草薙剛、クリスタル・ケイ、志村けん、舘ひろし、広瀬すず、福原遥、辺見マリ、松田聖子、柳沢慎吾、ユリア・リプニツカヤ、横溝正史、与謝野晶子、吉田茂、吉野作造、レディー・ガガなどがいます。

陰陽五行によると、2022年は「壬寅（みずのえ・とら）」にあたります。「壬」には、植物の内部に種子が生まれた状態という意味があります。また、「寅」には、草木が初めて地上に生じる状態、同僚、つつしむ、助けるという意味があります。このため、「壬寅」は「新たな局面に向け、一致団結する年」ということになりましょうか。

2021年は、新型コロナウイルス感染症の影響により、引き続き厳しい経済環境下にありましたが、ワクチン接種の進展や新しい生活様式の実践などにより、感染症の脅威を打ち破ることを予感させる年でもありました。壬寅の2022年は、お互いに協力・連携し合うことで、この予感を現実のものとし、苦しい時期を乗り越えることができるかもしれません。ウィズコロナ、アフターコロナの新時代に向け、「寅亮（いんりょう）」し、「龍虎の勢い」で飛躍する年としたいものです。

※寅亮…敬んで協力すること

※龍虎の勢い…勢いが盛んなこと

※寅の話は十二支物語（大修館書店）などから当社で作成

2021年12月
山梨中銀経営コンサルティング株式会社